

特別講演

ニカメイガの今昔

田付 貞洋 (元東京大学)

ニカメイガは、かつてわが国稲作害虫の「横綱」だった。しかし、20世紀後半になると減少してほとんど「ただの虫」になった。この減少は、米増産に向けた栽培体系の種々の変化が総合的に働いた、「意図せぬ IPM の結果」と総括されている。いっぽう、本種は、発生パターンの可塑性や殺虫剤抵抗性などから、高度の適応性を持ち、重要害虫にリバイバルする可能性があるとして繰り返し指摘されてきた。実際、地域的な多発はこれまでにしばしば生じている。私は、すでにニカメイガが減りだした 1970 年に理化学研究所で本種の性フェロモンの研究を命じられ、これをきっかけとして多年にわたり本種とさまざまに付き合うことができた。今回はその中から、①：性フェロモンの第 3 成分、Z-9-ヘキサデセナールの発見の経緯と、その後のこの物質をめぐるさまざまな方向への展開。②：イネと並び本種の主要な寄主植物であるマコモに寄生する個体群とイネに寄生する個体群との比較から、両者が実際にはほとんど交流しておらず、すでにそれぞれが別種への道を歩んでいる事実。③：②の研究から導き出されたニカメイガの害虫化に関するシナリオの三つを紹介し、最後に、日本における本種の将来を展望する。